

## 国際ボランティアの寺

国内に数多ある仏教寺院の中で、「国際ボランティアの寺」という看板を掲げるお寺があるのをご存知だろうか。初めてこの言葉を耳にすると、誰もが妙な違和感を覚えるかもしれない。たんに聞き慣れていないということもあるが、広く世界を視野に入れた活動である「国際ボランティア」と、それとは対照的ともいえる身近な地域に密着した「寺」。さらに言えば、伝統と現代社会、静と動、そしてグローバルとローカルといった対概念を想起させる、これら二つの言葉が組み込まれているからではないだろうか。

これは、シャンティ国際ボランティア会 (SVA) の趣旨に賛同し、国際協力の活動を直接・間接的に支援しようとの思いで構成される仏教寺院のネットワークである。実際に、文字通りそうしたプレートを門前に掲げるところは多くはないが、「国際ボランティアの寺」として加盟する寺院は全国でいま約 200 箇寺にのぼっている。

これまで紹介してきたようにシャンティ国際ボランティア会 (SVA) の前身は、カンボジア難民の救済活動を目的に結成された曹洞宗東南アジア難民救済会議 (JSRC) であった。そのため、会を支えるサポーターの大半が、同じ宗派の寺院や宗門関係者であったことはある意味当然の成り行きでもあった。しかしやがて、「宗派や国境にとらわれず、仏教精神に基づいて苦難の中にいる人々に向き合おう」という SVA の思いと、そして何よりも長年にわたる彼らの地道な活動は、宗派の垣根を越えて多くの仏教者の心をつかんでいった。そうして、地域社会に根を張りながらも、SVA を通じて国際協力活動に少しでも参画したいという寺院が、次第に現れるようになったのである。

会誌『国際ボランティアの寺』を創刊 (2004 年) するにあたり、SVA 会長 (当時) の松永然道師は次のように思いを述べている。これら (国内外で山積する問題 (著者註) を打開する〈共生の原理〉として、じつは仏教の〈縁起〉の考えが待望されているのではないのでしょうか。(中略) けれども、具体的な働き掛けがないところには、慈悲も智慧もありえないでしょう。他者の幸せがない限り、私の幸せはない——。宗派を越え、国境を越えて、その菩薩の行願を実現すること、〈慈悲の社会化〉による〈縁起社会の実現〉こそ、「国際ボランティアの寺・菩薩行実践道場」に参加する私たち共通の願いです。

## 大輪寺の取り組み

こうした菩薩行を実践している寺院の一つが、長野県上田市にある天照山大輪寺である。

ご住職の近藤博道師は、以前より縁あって SVA の会員にはなっていたものの、長く会費を納める程度だった。しかし 2003 年の「カンボジア交流体験ツアー」に誘われて参加したところ、SVA の活動がいかに現地の教育支援に役立っているかを目の当たりにし、感動したという。

紙そのものが不足している環境の中で、目を輝かせて絵本を手にしたたり、見よう見まねで大事そうに折り紙を折る子供達の姿が胸を突いた。彼らは、我々が見失った物の大切さやありがたさ、それを得た喜びなど、いくつもの充足をもっていること

を感じた。逆に私たちは豊かになりすぎて、欲望のとりこになっているのではないかと自問させられた。そして帰国後、わずかなことでもできることからやろうと思いつき、檀家さんの理解と協力を得ながら、月に 1 回「絵本のシール貼り」を始めることにしたのだ。

これは SVA が進める「絵本を届ける運動」の一環で、前稿でも紹介したように、日本で出版された絵本にカンボジア語やラオス語等の訳文シールを貼るボランティア活動である。現地の初等教育を支援しようとの思いから 1999 年に始まり、2009 年には 2 万冊以上の絵本がカンボジアやラオス、ミャンマー (ビルマ) 難民キャンプ、そしてアフガニスタンへと届けられた。

大輪寺では毎月の第一水曜日が活動日となっている。朝、檀家さん達がお寺に三々五々集まってくる。ご住職への挨拶を済ませると、席へ着き黙々と「絵本のシール貼り」作業を始めていく。誰もがすでに要領を得ているようだ。訳文シールを台紙から切り取り、絵本の日本語部分をきれいに覆い隠すように貼り付けるだけだが、シールが歪んでしまったり、時には場所を間違えてしまったりと、思いのほか集中力が必要となる。訳文が見慣れない言語だったりすると、逆さまに貼ってしまうことすらあるのだ。心地よい静寂に包まれて、作業は進められていく。こうして、檀家さん達の手によってこちらの寺院から送り出された絵本は、累計 1,000 冊以上にのぼるといふ。

作業が一段落すると、近藤師が参加者に対して SVA の近況報告やカンボジアやラオスへの視察ツアーを紹介。その後、和やかな茶話会をしばらく楽しんで散会となった。

近藤師は、「複雑な作業ではないが、我々の思いを現地に伝え、そして現地の人々の気持ちもこちらが理解しようとする姿勢。思いを共有するということが重要だと思う」と静かに語る。

では、信州の地に住みながら遠く海外の子供たちを支援しているのはなぜなのだろう。「国内外に多くの問題がある中で、人それぞれの関わり方があっていいのではないのでしょうか。私たちはたまたま、SVA さんに会っただけですから」と、少し意地の悪い質問にも笑って応じてくださった。

お茶の席で参加者からは、「海外の問題が身近に感じられるようになった」「感謝の気持ちが足りない日本の子供達にも、この活動を広めていけたら」という声が聞かれた一方で、ある方が私の耳で「私は海外へ 1 度も行ったことがないのだけど、あのご住職の人柄に惹かれて参加しているんですよ」と、そつと囁かれた言葉が印象的であった。

「国際ボランティア」と「寺」を結ぶ橋渡し役が SVA だとしたら、そこに温かい血を通わせ活動体としての息吹を吹き込むことができるのは指導者の強い動機付けと行動力、そして何よりもその方的人格 (信仰心) ではないだろうか、そう感じた。



SVA 活動の思いを語る近藤博道師 (中央奥)